

●グローバル化時代の医療・検査事情

元・大使館付医務官の独り言

第五話「マイアミでワトソン博士にサインをねだる」の巻

よし だ さだ のぶ
吉 田 定 信
Sadanobu YOSHIDA

「ワトソン博士が来るよ。聴きに来ないか」「ワトソン博士って、あの“ワトソンとクリック”のワトソン博士か」「そうだ。凄いだろ」筆者は2000年から2003年にかけて米国フロリダ州のマイアミ¹⁾にある日本総領事館に勤務していた。マイアミといえば、イチロー選手が所属する大リーグ球団のマーリンズやNBAの強豪チーム、ヒート²⁾が本拠地になっているような米国南部の大都市である。医療先進地であることはいうまでもない。マイアミのように恵まれた環境にある日本総領事館になぜ医務官がいるのかと、不思議に思われる読者もいらっしゃると思う。マイアミに駐在する医務官は、フロリダ州だけを担当としている訳ではなく、マイアミを基点として周辺途上国の日本大使館を巡回する広域担当官としての役割を担っている。すなわち、筆者はカリブ海のジャマイカ、ハイチ、トリニダード・トバゴや、アクセスが困難なスリナム³⁾という南米大陸の小さな国にも定期的に出張していた。また筆者には、カリブ・中南米地域のいわゆる医療過疎地からマイアミへ緊急移送⁴⁾されてくる日本人患者を高次医療機関へ紹介するという役割もあった。マイアミは、米国本土とカリブ・中南米地域を結ぶハブとして重要な拠点なのである。このように席の温まる暇もないように飛び回る生活だったが、マイアミにいるときはマイアミ大学医学部の分子生物学教授と家族ぐるみの付き合いをしていた。冒頭のやりとりはその教授との会話だ。マイアミ大学医学部は毎年ウィンター・シンポジウムを開催している。2003年は医学部創設50周年に当たり、DNAの二重らせん構造が発見されてから50周年と重なったこともあり、2月のシ

ンポジウムにジェームズ・ワトソン博士を招いた、というのが事の背景なのだ。

ワトソン博士といえば、分子生物学上20世紀最大の発見ともいわれるDNAの立体構造を明らかにした泣く子も黙るビッグネームだ。筆者は二つ返事で教授からの招待を受けた。ただ、既に広く知られているように、この業績には、他の研究者が撮影したDNA結晶のX線回折写真を、ワトソン博士が無断で見たという疑惑がつきまとっている。いやそれは物語だ、神話だと否定する論者もいる。本稿で疑惑の真偽を論じるつもりは毛頭ないのだが、ワトソン博士がノーベル賞受賞後に著した『二重らせん』⁵⁾には、この写真を見たときに胸が高鳴ったと書かれている。2012年には同著の“注釈版”(The Annotated and Illustrated Double Helix)が世に出て、写真の入手経緯についても旧版とは異なる事実が書かれているらしい。2015年には邦訳⁶⁾が出たが、“完全版”とタイトルを変えているのはなぜだろう。それはともかく、本稿を書くにあたり、後年になって明らかにされた事実を知ってしまうと、当時を描く筆に影響が出てしまう。すぐにでも読みたいという衝動を抑えて、“完全版”は本稿を校了した後に読むことにしよう。

さて話を当時に戻す。大科学者の講演を生で聴けるめったに無い機会である。筆者は最前列でワトソン博士の登場を待った。フロアが静まり返る。ゆっくりと登壇するワトソン博士。静かな口調で基調講演が始まる。共同研究者のフランシス・クリック博士は体調不良のためビデオ出演となった(翌2004年7月没)。フロアにいたアジア系のおそらくイン

ド系であろう若い研究者たちは、最初から最後まで熱心にメモを取っていた。新興国と呼ばれる国々から来た若手研究者たちの勉強熱心な様子がひしひしと伝わってきたのである。ワトソン博士は、「この発見は、インターネットも電子メールもない時代に成した業績である。私は研究仲間にも恵まれたのだ」と語り、昨今のIT偏重社会を暗に批判した。恵まれた研究仲間とは、共著者のクリック博士であることはいうまでもないが、同時にノーベル賞を受賞したモーリス・ウィルキンス、そして決定的なX線回折像の撮影に成功したもののノーベル賞の荣誉に浴さず早世したロザリンド・フランクリンも含んでいたのであろうか。ワトソン・クリックのノーベル賞受賞論文⁷⁾は、わずか2ページの論文である。そこにはX線回折写真は掲載されておらず、ロザリンド・フランクリンの文献も引用されていない。論文の末尾に「モーリス・ウィルキンスとロザリンド・フランクリンの未発表の実験結果に触発された」と簡単な謝辞を述べているだけである。

講演は終わり、フロアの聴衆はスタンディングオベーションをすることもなく、淡々と聴講を終えたように見えた。壇上とフロアの間には、明らかに“何か”があった。それは畏怖か、敬意か、それとも…。しかし筆者は、DNAの三次元構造を発見したという世紀の大科学者を眼前としたとき、呆然として巨人を見上げるばかりであった。講演が終わる。演者が壇上から降りようとする。聴衆は次のセッションに目を通し始める。今だ。筆者は立ち上がり、降壇するワトソン博士に近づき、「学校でDNAのことを習って以来、あなたは私のヒーローでした」とやや誇張気味に語りかけ、手に持っていた紙とペンを差し出し、サインをねだったのである。ワトソン博士は気難しがり屋で有名だが、にこやかに「サンキュー」と答え、紙に小さくサインをしてくれた。筆者がサインをもらおうと、フロアの聴衆は総立ちとなり、我も我もとワトソン博士に群がった(写真)。あっという間にサイン攻めに遭うワトソン博士だったが、一人ひとりの求めに丁寧に応じている博士の後ろ姿を見ながら筆者はその場を後にした。会場の出口で前出の教授と出くわし、教授は「やったね」とウィンクしてみせた。ウィンクの意味は、「サイ



写真 フロアでサイン攻めに遭うワトソン博士(後ろ姿)

ンをもらえてよかったね」なのか、「会場を盛り上げてくれてありがとう」だったのか、それはもうどちらでもよかったのである。後日、医務官仲間はこの自慢話をする機会があったのだが、「ああ、他人の研究結果を見た人ね」と事情通の反応は手厳しい。しかし、筆者にとっては夢のような出来事だったのだ。ワトソン博士が存命中にも関わらず自身のノーベル賞のメダルを競売にかけるという衝撃的なニュース⁸⁾が流れるのは、もっと後のことになる。(つづく)

文 献

- 1) 吉田定信. 各国医療事情. 米国～南フロリダを中心として～. 海外勤務と健康(労働福祉事業団). 2003; 18: 26-32
- 2) 吉田定信. NBAチームドクターズの活躍. 日本医事新報. 2003; 4129: 44-46
- 3) 吉田定信. スリナム共和国の疾病医療事情. モダンメディア. 2002; 48(3): 67-72
- 4) 吉田定信, 小島奈津代. 米国におけるトラベルアシスタンスの実際. 日本医事新報. 2002; 4067: 61-64
- 5) ワトソン, J.D.(著). 中村桂子(訳). 江上不二夫(訳). 二重らせん. 東京: 講談社文庫; 1986
- 6) ワトソン, J.D., 他(編). 青木薫(訳). 二重螺旋 完全版. 東京: 新潮社; 2015
- 7) Watson, J.D. & Crick, F.H.C. Molecular Structure of Nucleic Acids. A Structure for Deoxyribose Nucleic Acids. Nature. 1953; 171(4356): 737-738
- 8) Feltman, R. The father of DNA is selling his Nobel prize because—everyone thinks he’s racist. The Washington Post. December 1, 2014.

本稿は個人の見解に基づくものです。